



阿彌陀仏なり」すなわち阿彌陀仏の大悲の胸の中に迷える衆生すべてがだかれているといわれています。

人と仏は不可分であつて、分離することができません。人（機）と阿彌陀仏（法）が一体不離である姿が機法一体の南無阿彌陀仏の六字といえるのではないのでしょうか。

妙好人でましました松並松五郎さんがある時、「南無は人阿彌陀仏は人を下から抱いて離れぬ。それが南無・阿彌陀仏の六字に表れている」と申されました。人の存在に離れず、人を根底から抱いている存在の真実のすがたを南無・阿彌陀仏の文字が表しているとうかがわれます。

しかも人（凡夫）はどこまでも人（凡夫）であつて、仏ではない、いわば仏と人は同じではない、すなわち人と仏は不可同なのであります。すなわち仏と人は不可分にして不可同であります。

「人は仏と不可分であり不可同でありつつ、その仏が人を助けようと働きづめである。この働きに目覚め、この働きにそつて生きるべく人は定められていゝ。——これが、人生の第一の真実であり、世界の第一の真実であり、歴史の第一の真実であります。南無阿彌陀仏の名号六字は、このことを端的に明示しています。南無阿彌陀仏がご本尊といわれるのはこのゆえでありましょう。ご本尊とは、根本的に尊いはたらきということとです。これを無視して人は真に生きられないのです。

「人である」という単純な事実には、このような真実がふくまれていゝのです。このゆえに人はみな平等に尊厳なものであります。すべての人は等しく尊い存在であります。このことをおいて人は平等に尊いとはいえないと思ひます。なるほど人はいろいろな意味で平等であるとはいへませう。たとえば、人はみな手足があり目があるとか、人はみな考える動物であるとか、人はみな死ぬ存在であるとか、そういう点でたしかに平等であるに違いありませんが、「尊い」とはかならずしもいえません。

また現代社会では、平等に教育を受ける権利があるとか、男女平等に選挙権があるとか、思想信仰の自由が総ての人に平等に与えられているから、人間は平等であるといひます。しかし、それは人間同士のお互いの合意の上ではじめて可能であつて、合意がない社会では平等に与えられているとはいへません。例えば、南アフリカではつい近年まで、選挙権は特権階級だけのものでした。

「人間はなぜ平等に尊い存在であるのか」これは極めて大事な問題です。ただ単なるスローガンとしては、だれでも人間の尊厳だとか平等だとかはいひますが、「なぜ」といふことになると途端に分からなくなつていゝのです。そのために、人間の間で、民族の間で、差別と排除がたえず、戦争の大きな原因にもなつていゝます。コソボでは現在、セルビア系の人たちがアルバニア系の人たちを武力で追い出しにかかつていゝます。そのためアルバニア系住人の多数が殺され、難民は50万人に達するといわれています。なぜセルビア人はそういう暴挙にでたのでしょうか。その理由は、報道されていゝところにより、報道されていゝところにより「民族浄化のため」だそうなんです。浄化とは汚いものをきれいにするということです。だとすると、アルバニア人を劣悪な民族と決めつけて、これを排除しようといふのでしよう。

そこでは人間の尊厳は無視されていゝます。人はすべて等しく仏とともにあり、仏に無条件に愛されて、仏の願ひに生きるべく定められていゝ尊い存在です。そういう真実を告げ知らせていゝのが南無阿彌陀仏の御名であります。この御名によつて私たちは人間の等しく尊厳なることを知らされていくのです。

こうして、阿彌陀仏との奇しき結びつきを御名によつて知らされていく生活が念仏生活といひましょう。私が大谷大学の学生だった頃、その時の指導教授は松原祐善先生であつた。数年前にご往生なされましたが、古武士風でしかもすこぶる謙虚にして信心に生きておられる先生でした。松原先生のご講義の中でしばしば引用されたお言葉の一つに「あさなあさな、仏とともにおき、ゆうなゆうな、仏をいだき

ていゝす」といふのがありました。安心決定鈔のこの言葉は、中国梁・陳時代の傳（ふ）大士という人の言葉です。かれは仏教に深く帰依し、仏の真実を体験した人だといわれています。この言葉には、信心の生活が端的に表現されていゝます。「あさなあさな仏とともにおき、」毎朝仏とともに起き、「ゆうなゆうな仏とともにいゝす」毎晩仏とともにやすむ。いわゆる毎日の生活は仏様と寝起きするよう、常に仏とともにいゝ生活であらわしたものです。こういう生活感情でもつて生活できることほど幸せなことはいゝません。松並さんが「阿彌陀さんは私の背中にござる」と仰せられていゝました。阿彌陀仏と私は松葉のよう、どこにいても二人づれ。まことにうるわしい信仰生活です。

阿彌陀仏は私を抱いて離さぬ永遠の大悲の親。阿彌陀仏と私は親子のごとくに親しい。阿彌陀仏と私の交わりが次第々々に深まっていくことは、なによりも有り難く、人の心を本當に解放してくださいます。阿彌陀仏と私が心の交流をし、それが深められていく、そのような念仏生活を日々送りたいものです。（文・土井）



赤詰草

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。悪人を、世のひとつねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや。この条、一旦そのいわれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善のひとは、ひとえに他力をたのむところかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれは、いづれの行にても、生死をはなることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おおせそつらういき。

(歎異抄第三章)

(第十二講)

〔現代語訳〕善人ですら往生をとげるのです。まして悪人が往生をとげられないことがありましようか。しかるに世間の人は常に、悪人ですら往生するのだから、まして善人が往生しないことがあるうか、といっています。この考え方は、一応もつともなようですが、阿弥陀仏の本願他力の救いのみころには背いています。

そのわけは、自力をもつてなした善行をたのんで往生しようとしているような善人は、阿弥陀仏の本願他力だけを、ひとすじにたのみ、おまかせをするという信心のない人ですから、本願のみころにかないません。けれども、そういう人も、わが身の善をたのみ自力の心を改めて、阿弥陀仏の本願他力を見たのみ、おまかせするならば、本願力の御はからいによって、真実の悟りの境界である真実報土に往生をとげさせていただくことができます。

あらゆる煩惱を身にそなえている私どもは、どのような修行をしてみても、生死の迷いから離れることができないことを憐れみたまうて、たすけようという願いをおこされたのが阿弥陀仏でした。その本

願のご本意は、煩惱具足の悪人を救うて、完全な仏陀にならしめるためですから、本願をたのみ、他力にまかせきつて居る悪人こそ、第一に往生すべきものです。それゆえ、善人でさえも往生させていたたくのだから、まして悪人はなおさらのことであると、仰せられたことでした。

この第三章でいわれる悪人は、「他力をたのみたてまつる悪人」のことであり、みずからを煩惱具足の凡夫であつて、どのような修行をしてみても迷いを離れることのできない悪人であるとい限つて、本願他力をひとえにたのむ人が、「いわんや悪人をや」といわれる悪人のことです。

逆に、みずからの能力をたのみにして、弥陀の本願をたのみ、己の為す善根をたよりとして往生をたのむとくもくろむ人が、「善人なおもて」の善人です。この自力作善の人も、自力は無効であると、自力のころをひるがえして本願他力をたのめば、真実報土の浄土に往生することができるといふ。そのように、自力に固執している善人でも、ついには自力を無効と知つて本願他力に帰し、報土へ往生してゆくのです。

いわんや、みずからを、少しも煩惱を離れることのできなない悪人であると見限つて、すなおに如來の本願に信順する人は、すみやかに真実の浄土に往生をとげるのである、とのお心がこの第三章にのべられていきます。

なぜこうしたことがいえるのでしうか。それは、阿弥陀仏が本願をおこしたまう本意、悪人成仏のため「だからであります。法然聖人は、本願は「も」と凡夫のためにして、兼ねては聖人のためなり」といわれました。本願の直接のお目当ては、佛道修行のとも及ばない煩惱具足のおろかな悪人・凡夫であります。しかし、弥陀の本願は、愚かな凡夫ばかりでなく、聖なる道をもとめて修行する賢者にも及んで居るのであります。

なおここで、浄土の往生といわずに、真実報土の往生とわざわざ言つて居るのはどういふわけかといえれば、どこまでも自力をたのむ善人はたとえ浄土に往生しても、浄土のなかにありながら、なお自らの起す想念の世界に閉じこもつてしまふといわれ、それを「方便化土への往生」といわれています。そうした自力をひるがえすことなく、自分の善根でも

つて、阿弥陀仏の救いにあずかろうとする、そういう自力疑心の行者が往生する境界を方便化土の浄土といわれるのです。方便化土と教え示されることによつて、自力の疑い心をいましめるとともに、そのような自力の行者たちをもなお教育的手段をもつて救わずにはおかないという如來大悲の深さを表して下さつたのです。

それに対して、本願他力を一心にたのむ信心の行者の往生は、純粹な真実の浄土への往生であると示され、それによつて私どもが本願他力をすなおに信じることをおすすすめ下さつておられます。

報土というのは法蔵菩薩の本願に純粹に報いあらわれた清浄安樂の世界であることを示す言葉です。

さて、こうした善人・悪人の見方のほかに、少し違つた視点から、この「善人なをもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」をいたたくことも先輩の指摘によつてなされていきます。次にその視点から考へてみたいと思ひます。

それはおなじ歎異抄の十三章に「うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畠をつくりてすぐるひと、ただおなじことなり」

(聖人はまた、海・川に網を引き、つりをして世を渡る者も、野山に獣を狩り、鳥を捕らえていのちをつなぐやからも、物売りを業ともし、また田畑をたがやして口すぎをする人々も、本来同等のものであると、仰せられた)

という言葉があります。ここで、海や川で魚を捕つて生計をいとなむもの、野や山で獣を捕つて生活するもの、田畑を耕して生きるもの、そういう人びとは当時、悪人としてさげすまれていたものでした。下類とされてきました。いわゆる賤民であります。

聖人の唯信鈔文意に「屠(と)は、よろずのいきたるものを、ころし、ほふるものなり。これは、りょうしつというものなり。沽(こ)は、よろずのものを、うりかうものなり。これは、あき人なり。これらを下類というなり。」

(屠は、よろずの生きて居るものを殺しほうむる者である。これは、漁師・獵師というものである。沽は、よろずのものを売り買う者である。これは商人である。これらを世の中では下類といわれているのである。)

生き物を殺してしか生きていけない漁師や獵師、

またものを売り買いする商人などは下類とされ、下賤の民とされました。田畑を耕す農民も莊園の農奴としてはたらくなど、下層民とみなされました。田畑を耕すことは生き物を殺すことが多い仕事でした。そのように殺生をしなくては生きられない人たち、

しかもこのような人たちは、貧しくて、自分の罪業を除くような仏事をいとむことも、先祖の法要を行うこともできませんでした。土地や職業にしばられて、出家し仏道修行するなどということからはほとんど見放されていた人たちです。ですからそうした下層民たちは、殺生をしても、滅罪の法要もしない「悪人」とされていきました。

それに反して、貴族や特権的な僧侶たちは殺生をする事は少ないし、自らの罪を仏事を営むことによつて除いていこうという人たちです。たとえば貴族たちがよく行った法要に逆修法要というのがありません。それは自分の死後、自分の罪ゆえに悪道に落ちないで、天上なり浄土なりに生まれることができるように、自分の罪業を生前にあらかじめ浄化するための法要です。このような法要は、経済力のある貴族などの特権階級の人たちだけがする事のできる仏事でした。

このような社会の支配者や指導者やエリートたちなどの、ごくわずかの上層の人達は、みずからを「善人」と任じていたのであります。

下層民は、生活のためにやむなく殺生をしており、しかも己の罪を浄化する仏道修行や滅罪の法要をなしえない底辺の人たちであります。ですから、死後に悪の報いとして、地獄や餓鬼などの世界に落ちることをおそれ、たたりやバチをおそれ、不安と生活苦にあえいでいました。ただその日その日を生きているだけで精一杯で、仏道の修行などは及びもつかず、社会の底辺で虫けらのように生きるより他に生きようのない人たちでした。

そういう人たちがそれが実は弥陀の本願のお目当ての人たちであります。なぜなら、弥陀の本願は、仏道修行などは到底できない愚悪の凡夫を助け、この大悲の力によって万人を助けようとの願いから立てられたものだからです。本願を信じて念仏申す道は、そういう底辺の人こそがまずもつて救われる道でありました。このような人たちがこそまさに浄土を願い、念仏申す道を歩む人であり、本願他力をたのむほかに道なき人たちであります。「阿弥陀仏の誓いを信じて、汝の生活のまま、生まれつきのそのすがたのまま、ただ念仏して来たれ、我よく汝を浄土に導かん」と仰せ下さる阿弥陀仏の大悲は、まさに当時悪人とされ、助かる縁も手がかりもなき下層の民への大いなる光明でありました。

ま、ただ念仏して来たれ、我よく汝を浄土に導かん」と仰せ下さる阿弥陀仏の大悲は、まさに当時悪人とされ、助かる縁も手がかりもなき下層の民への大いなる光明でありました。

そうした、善人を任じている世の上層の人たちも、己の能力を頼みにしての仏道修行や、あるいは滅罪を目的とした仏事をして、それは単なる慰めにしかならず、あるいは自分の能力の限界にぶつかって真の救いを見出しえないことを知らされてきます。それは、やがて、自力をたのみにする心をひるがえし、底辺の人と等しく阿弥陀仏の本願をいただいて念仏申すものとなって、まことの救いを見出すことができたのであります。

さて親鸞聖人はご自分を社会の上層の部類に身を置かれたのかどうか。実は聖人の書かれた先ほどの唯信鈔文意には「りようし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つびてのごとくなるわれらなり」と仰せられ、獵師や商人などの下類を「われらなり」と、ご自分を下類と等しき者に入れておられるのであります。

実は聖人は世の中の支配者であった藤原氏の流れをくむ日野家という貴族の出身であります。しかも天台宗の本山で二十年も学問をされたすぐれた知識人であり、さらに高僧法然の有力な弟子でありますから、まさにピカピカの人です。けれども聖人の書かれたものの中で、私は貴族の身分の出であるとか、比叡山で二十年も学問をした学識豊かな僧であるとか、そういうご自分を権威づけられたり、誇るような言葉はなに一つありません。ご自身を「底下の凡夫」とされ、底辺に身をおかれて、ひたすらに阿弥陀仏の広大な徳をおおいでおられます。

阿弥陀仏の本願の真実に照らされて、聖人は人間の間の身分や家柄などは、畢竟そらごとたわごとであつて、すべての人は等しく群萌であり、群生であることをハッキリと知りぬいておられました。群生も群萌も生い茂っている雑草の如きをたとえた言葉です。

この世では貴い身分や賤しい身分を分けていますが、本来は等しく雑草のごとき民草であることを明らかに認識しておられました。ですから、その当時、偉い高僧がたくさん出ましたが、群萌の一人として

生きられ、群萌の苦しみをになつてくださった高僧はなんといつても親鸞聖人でありました。法然聖人も親鸞聖人と同じ平等な人間観にたつておられました。なごご自身は自身の清僧で通されて尊い生き方をされましたので、一般庶民の生活とは距離がありました。

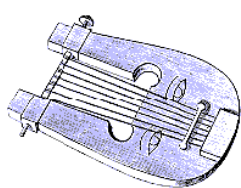
親鸞聖人は、皆と同様、家庭生活を営まれ、漁師・獵師・農民など最下層の人たちと生活を共にされました。

弥陀の本願は、ことに悪人といわれ、世の中の支配者たちから下類と決めつけられていた人たちにこそまず第一に向かいたもう大悲の活動でありました。ひるがえつて、現代の私たちは、ともすると、経済力や学問や技能や権威に執着し、それでもつて自分や自分たちを他者よりもより社会的に優位に立とうとし、貧しい人たちや社会の偏見に苦しんでいる人たちや社会の隅に追いやられた人たちを差別し排除しかねません。こういう私たちの生き方にたいして、聖人の生き方は強烈な照射を与え慚愧(ざんぎ)をせまるものであります。

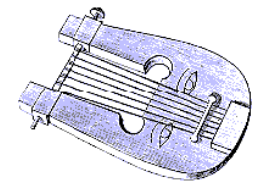
なお、この第三章のなかの「他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり」という節は、読みにくいのです。すなわち「悪人が、往生の正因である」といわれているのですが、これをどう理解すべきかという点です。

これについては、先輩の教示によりますと、「他力をたのみたてまつるほかに悪人成仏の道なし」ということと「他力をたのみたてまつる、これ往生の正因なり」という二つの内容を、一つの文章に合体して、表現を強調させたものと理解するのがよいということです。

ともあれ罪深くしか生きられないものを憐れみ、その罪業のゆえに大悲をおこして浄土へ生まれしめようと誓われた本願ですから、その本願をたのみ、その御はからいに、わが身のすべてをまかせている悪人こそ、第一に往生すべき人であり、そのように自力をすてて他力をたのむ心こそ往生の正因である、といわれたものであろうと思ひます。(文・土井)



キタラ



ギター